

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（5）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳

（代表 森 昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行の Johannes Pauli: Schimpf und Ernst 第168話—第215話である（第167話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，第32巻4号に所載）。使用テキストは1924年刊の Johannes Bolte 編（リプリント版1972年）を用い，適宜 H. Österley の版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch 研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1992年7月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名誉教授），木野茂（保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第168話—第171話	木野	第191話—第197話	山田
第172話—第175話	精園	第198話—第203話	青木
第176話—第179話	中条	第204話—第206話	大沢
第180話—第185話	橋本	第207話—第209話	森
第186話—第190話	森	第210話—第215話	木野

第百六十八話 冗談

「牛の頭」の紋章のために争った二人の貴族のこと

ある時、フローレンスの高慢な貴族が、ミラノの床屋へやって来ました。そこで、貴族は様々な色や形をした窓に、「牛の頭」の紋章を見つけました。それはその貴族の紋章や印と同じものでした。貴族は言いました。「この町の誰がこの紋章をつけているのか。この印はわしの物だ。わしは他の者がこの紋章をつけるのを好まないのだ。」そこには別の貴族がいて、ソファーに横になっていました。その貴族は言いました。「その印はわしの物だ。あの男もその紋章をつけたがっているとは、わしには不愉快だ。わしはその紋章を両親から受け継いだのだ」と。フローレンスの男は、この貴族に決闘を求めました。彼は言いました。「わしはひるんだりはしないぞ。」決闘の日が決められました。柵やそれに付随するものが作られました。

その日になると、フローレンスの男は鎧をまとい刀を帯びて、その場へやって来ました。そこには大勢の群集が集まっていた。ミラノの男は、従僕を従え、武器は持たずに、テンの毛皮と紋織りの長い上衣を身にまとしてやって来ました。フローレンスの男は言いました。「鎧もつけず武器も持たないで、そんなふうにあんなにただやってくるとは、わしを軽んじるつもりか。」ミラノの男は言いました。「我々は互いに命をかけて戦うことになっている。でも我々は互いに害を加えあつたわけではない。どうして我々は戦わねばならないのか。」フローレンスの男は言いました。「おまえがわしの印を身につけているからだ。」ミラノの男は言いました。「おまえの印は何か。」フローレンスの男は言いました。「雄牛の頭だ。」ミラノの男は言いました。「わしのは雌牛の頭だ。」もし相手が雌牛の頭の紋章だと言っていたら、その男は雄牛の頭の紋章だと言ったでしょう。こうして決闘は避けられました。

人間というものは永遠の生を求めて、永遠の名誉のために、何を耐え忍ぶべきかが、ここで実際充分学ばれることが出来ましょう。人間は紋章の印のためにさえ、こんなふうに関心することを望むのですから、天国を求めてはどのように争うのでしょうか。我々は勞せずして天国を、つまり働くこ

となくして報酬を得ることを好みます。だがいわれなくして何物も、我々に与えられはしないのです。我々は傭兵に似ているのです。

第百六十九話 冗談

傷を分かち合うことを望んだ男のこと

二人の男がある時一緒に戦に出かけ、互いに誓いをして、一人の男が得た物は別の一人と分かっことになりました。二人がほぼ目的地近くまで来ると、一人の男が怖気づいて仮病を使いました。もう一人の男は、更に先へ進み、事がうまく運び、それによっておよそ三百グルデンを手に入れました。男は再び仲間の所へ戻って、一緒に故郷へ帰りました。病気にかかった男は、仲間がお金を自分に分けてくれる時を待ち望んでいました。ある時、病気にかかった男が野原で言いました。「おまえさん、おれとかわした契約を覚えているかい。戦利品をおれと分け合うべきだよ。」すると仲間の男は言いました。「その通りだ、おまえさん。わしは戦争で二つの物を得たよ。怪我とお金だ。おまえとお金を分けろと言うなら、負傷もおまえと分け合うのが当然だよ。」こう言って、革の鞘から刀を取り出しました。病気にかかった男はそれを見ると言いました。「おまえさん、金も負傷も取って貰って結構だ。何も貰おうと思わないよ。」

我々もそうです。さて聖アウグスティヌスは言っています。「殉教者たちや聖人たちが耐え忍んだことに耐えようとしなない者は、その人々が到達した喜びにまで、到達することは出来ないでしょう。」

第百七十話 冗談

父親を讃えるらばのこと

ある時らばが、おまえはどういう動物かと尋ねられました。らばは答えて、自分は高貴な家柄の出だ、スペイン王の馬が自分の父親だと、言いました。そして絶えず自分の父を讃えました。誰かが母親は誰かと尋ねました。それにはらばは答えることを好みませんでした。母親は製粉所のろばだったからです。

らばは子供が生めないし、余りに熱すぎて、全てが自分の中で燃え尽きてしまいます。らばは、馬がろばと交わると生まれます。多分騎士である

父親を——母親は百姓女なのですが——その高貴なるが故に讃える多くの者は、らばと同じです。それ故人は、父親のために高慢になると同じくらい、母親のために卑下しなければなりません。我々についても同様です。我々は皆、父親は高貴です。我々は皆神より出ています。我々には父親があります。我々にはまた、我々が生まれ、寄りかかって生活し、再び帰って行く母なる大地があります。最後の審判の日には我々は、生へ或は死へと再び生まれ変わるでありましょう。それ故、謙虚でありなさい。そして誰も軽蔑してはなりません。

第百七十一話 冗談

大地にキスした男のこと

王に三人の息子がいました。父の死後、どの息子も王になることを望みました。三人ともアポロの像のところにやって来て、父の死後誰が国を治めるのかと、その像に尋ねました。アポロは「最初に母親にキスした者だ」と言いました。すると一人が地面にひれ伏して、我らが全ての母なる大地にキスをしました。その男が実際また王になりました。

第百七十二話 冗談

野兎を自慢した鷹のこと

ラテン語で *sterla*¹ というのは野兎を襲う鷹の一種ですが、この鷹がある時大きな野兎を捕らえました。鷹は大変空腹でしたが、名声を求める気持ちも強かったので、大勢の仲間のところへ行ってその野兎を見せ、かくも大きな獲物をどうやって捕らえたかを自慢しました。その野兎は仲間の鷹ばかりか、ほかの鳥にも大いに気に入られ、そのため連中はその野兎を鷹から取り上げ、食べ、野兎をもって行ってしまいました。そこで鷹は言いました。「*Qui vult rem suam pandere, cupit illam perdere.* (自分の持ち物を人に見せる者は、それを自ら進んで失うようなものだ。)」

宗教的見地からみても同様です。何か立派なことをして、同時に世間から褒められようとする人は、それを、すなわち幸福な気持ちを失います。

1 正確な鳥名は不祥。

グレゴリウス¹は言っています。「宝物をおおっぴらに身に着けている人は、とられても仕方がない。」自分が為した立派な仕事を自慢する人は雌鶏のようなものです。雌鶏は卵を生むと鳴き始め、秘密を漏らし、卵を失うことになります。今日私が何かを擱んでも、今私はそれを口にしてはならないのです。この世の名声がその報酬であり、いかなる報酬をも神から期待してはならないのです。

クリゾスティムス²は言っています。「立派な仕事には二つのもの、Honor et Premium（名誉と報酬）が伴う。」名誉と名声は神のものであり、報酬は私たちのものです。もし貴方が主なる神から神のもの、すなわち立派な仕事の名誉をとると、神は貴方から貴方のものをとろうとなさるでしょう。それ故に、神に神のもの、すなわち名誉を委ねなさい。そうすれば神も貴方に貴方のもの、すなわち報酬を委ねます。グレゴリウスは言っています。「Sic fiat opus in publico, ut intentio maneat occulta.（立派な仕事はその意図が知られないように、公然と為されるがよい。）」

第百七十三話 冗談

子山羊を踊らせた狼のこと

イソップの話によると、ある時一匹の狼が太った子山羊を捕まえ、食べようとしていました。その子山羊は狼に言いました。「お兄さん、噂によるとお兄さんは口笛を吹くのが、口で音を出すのが大変お上手とか、私を食べる前に口笛を吹いてみてください。私はそれにあわせて踊りますから。」狼が子山羊を放し、口笛を吹き始めると、子山羊は大声でわめき始めました。それを番犬が聞きつけて、子山羊を狼から救いました。

私たちがこの話で教えられることは、私たちが何か良い目にあう、何か得をする場合には、黙ってそれをやらねばならぬということです。諺に「己に得になることを黙し、不利になることを口にする人は賢し」と。お金、黄金、宝物を手に入れ、それを黙っていることができず、つい自慢し

1 教皇の名前。何世かは特定しがたい。

2 Chrysostomus, Johannes (347頃—407) のことと思われる。コンスタンティノポリス大主教、四世紀の代表的教父、聖書解釈学者、聖人。

て、結局それを失った人々について書くならば、紙面が足りなくなるでしょう。領主がそれを力づくで取り上げたこともあれば、法に訴えて取り上げたこともあります。福音書のなかの *de thesauro abscondito in agro de viduis* (畑に隠された宝について、やもめについて) (マタイによる福音書、第十三章) 書かれた、リラ出身のニコラウス¹の筆になる「宝探し、それは誰のものか」を読みなさい。

第百七十四話 まじめ

風が樫の木を倒したこと

一本の大きな樫の木が風のために池のなかに倒れました。そこには沢山のあしやよしが茂っていました。樫の木はあしに言いました。「私は大変大きいのに風は私を地面から根こそぎ倒し、お前らあしは大変弱々しいのに風はお前らには何もせず、お前らが立ち続けるのはどうしてだろう。」あしは答えて言いました。「貴方が私たちと同じようになされば、風は貴方に何もしないでしょう。風が来ると私たちは頭を下げます。だから風は私たちの上を歩いて行きます。私たちは風に素直なのです。風が通り過ぎてしまえば、私たちは再び頭を上げます。しかし貴方や他の大木さんたちは誇り高く、風に抵抗しようとなさいます。それ故に風は貴方がたをなぎ倒すのです。貴方がたも私たち同様頭をお下げになれば、真っ直ぐ立っていられるでしょうに。」

宗教的見地からも同じです。まっとうな人間たちはこの世にあって、それが神のものであろうと、人間のものであろうと、風すなわち罰に素直であり、それをやりすぎし、我慢し、沈黙し、この世では懺悔によってへりくだります。それ故最後の審判では、まっとうな人たちは頭を安らかに上げ、この世で懺悔をせず、素直になろうとしなかった傲慢な人々がどこに身を横たえ、どこへ投げ込まれるかを見るでしょう。

1 Nikolaus von Lyra (1270 頃—1349), フランスのフランシスコ会士, 聖書積義学者。

第百七十五話 冗談

デーダルスがイカルスに飛び方を教えたこと

作家たちの寓話に書いてあることですが、デーダルスと言う名の人が出て、その人は飛ぶことができました。その人には息子が一人いて、名をイカルスと言いました。イカルスは父に海を越えて飛んでくれ、自分も一緒に連れて行ってくれ、自分も飛ぶことを学ぶから、と頼みました。父は承諾し、息子イカルスに教えて言いました。「私がお前の先に飛ぶから、後について飛んで来い。あまり高く飛ぶと、日の光で翼を焼くことになる。あまり低く飛ぶと、塔や鐘楼にぶつかることになる。それ故その中間を保ち、私の後から飛んで来い。」父デーダルスは飛びました。そして息子イカルスは父の後について飛びましたが、飛ぶことができず大変気持ちがよかったので、父の教えを忘れて、あまりに高く飛んで翼を焼き、海に落ちて溺れました。息子の体が海に落ちる物音を聞いて父は振り返り、イカルスが海中で溺れているのを知りました。そこで父は息子に言いました。

Icare nate, bibis, iam nunc sine patre peribis.

Jam tibi dixi bis: medio tutissimus ibis.

Jussa paterna pati, medium tenere beati.

Icarici fati memores estote, prelati.

（私の子、イカルスよ！お前はいま溺れ、父親の助けも得られず、果てようとしている。

私はすでに二度お前に話した、中庸の道を歩むのが一番安全だと。幸せになる人々はみな父親の教えに従い、中庸の道を歩んだのだ。聖職にある人々よ、イカルスの運命を忘れないでほしい。）

このことをすべての傲慢な人々が、傲慢にならないよう、心すべきです。何故ならば、傲慢さというものはルツィファーを始祖とするからです。ルツィファーは言いました。「私は北風に逆らって舞い上がり、最高の人と肩を並べたいのだ。」しかしルツィファーは地獄につき落とされました。傲慢な人々は、父に従わず、父の教えを聞かなかったイカルスに似ています。同様に神父や父親の言うことを聞かない人々が沢山います。この人々は父や祖父よりも背伸びしようとしています。この人々は自分が受け継いだものに

満足せず、伯爵ほどの財産を得ようとし、自分の身分を高めるために、貴族のあいだで縁組しようとし、また貴族の暖房のきいた部屋に伺候しようとしませんが、そうすれば自分が貴族と見なされるからです。またこの人々は新しい衣服を作ったり、新たな流行をはやらせたり、長いひげをはやしたりしますが、もしひげをはやしているから立派だというならば、山羊は生まれる前から立派だということになりましょう。とにかくこの人々は父親が持っていなかったものを持ちたがります。

聖職界においても同様で、衣服のことであれ、頭にのせる冠のことであれ、そこに違いというものがなければおさまりません。同じように新しい意見を持つようとし、昔の学者の意見だの見解だのは嫌われます。私たちはとにかく特別なものを持ちたがりますが、それを言うのは *Doctores non famosi sed fumosi* (有名な学者でなく、灰色の学者) です。ジプシーやフス教徒たちがどうして生まれたかを考えてみるべきです。

第十六章 吝嗇について

第百七十六話 冗談

一日死んでいようと思った男のこと

昔、けちな男がいました。一晩中横になっていましたが眠られず、ベッドの中で何度も寝返りをうっていました。「あんた、どうしたの、落ちつきがないわね」と、女房が言いました。「ああ、気になることがあるので、わしのため手を貸して事態を変えてくれないか」と、男は言いました。すると女房は、「いいですよ、やりましょう」と言いました。亭主は、「わしは今までワインや、パン、塩に肉、ラードも、とに角一家に必要な物は何でも、一日間を除いて、皆面倒を見て来た。それで若しわしらが一日の間、食事しないでおれたら、わたしたちは丸一年の間満ち足りたことになるろう。この一日という日を、どう切り抜けるか考えをめぐらしたのだ。うちの雇い人どもの下男や下女たちが野良へ出たら、わしは死んだ振りをしようと思う。そこでお前は経かたびらと十字架、ろうそくと水を持って死体の傍に座って嘆いていてくれ。あいつ等が帰っても悲嘆の余り飯は食わないだろう。」これは女房の気に入る、その通り準備がされました。

野良から雇い人たちが帰った時、その女房は遺体の傍に座り、悲嘆にくれて、お前さんたちの主人が突然亡くなったのだと話しました。奉公人たちはびっくりして、それぞれ、主の祈りと聖母の祈りを五回ずつ捧げました。お祈りがすんで奉公人たちは言いました。「おかみさん、わしらは飯をすませておかねばならんのですわい。」そこで女房は、「こんなに私が悲しんでいるのに飯が食いたいのかい」と、言いました。奉公人は、「悲しかろうと、なかろうと、わしらはまた野良へ出るため、飯を食いますよ」と言いました。そしてさっさと飯の用意をしました。奉公人たちが食卓について食事をしていた時、この死んだことになった男はこう考えました。「わしの目論見は外ずれた。今わしが立ち上がると、死人が立ち上がったということで、あいつ等はひどくびっくりするだろう。そして驚愕の余り飯など食わないだろう。」死んだ男が起き上がったその時、下男の一人が傍に立てかけてあった斧をつかんで、主人を打ち殺しました。この下男に向かって女房は、金切り声を上げて叫んで言いました。「この人殺しめ、お前は私の主人を打ち殺したんだ。」下男は言いました。「いや、おかみさん、だってあんたは、旦那さんは死んだと言いましたぜ。悪魔が旦那の遺体を苦しめようとしたので、そいつを追払ったんですよ。」こうして主人は生涯を終えました。

この様に幾多の人たちは肉体の生命を失い、肉体の生命から永遠の生命を失うのです。この事は陽光を受けている百姓のように明白なことです。その百姓は財宝を入手するために戦争に出かけるのですが、突き殺されるのです。この商人はこれをやり、別の商人はあれをやり、とどのつまり自分の命を失い、永遠の命を失うことも明白です。

第百七十七話 冗談

吝嗇のために大抵の人は呪われること

昔、一人の憑かれた人がおはらいを受けていました。司祭が悪魔に、人間はどんな罪によって最も多く呪われるのかと尋ねました。悪魔は笑いだして言いました。「それは貴方たちが考えている様なものではない。あなたたちは、呪われるのは不貞のためだと思っているが、そうではなく大方の人は吝嗇のために呪われるのだ。」

これは真実を語っている、つまり不貞行為については人間は気に病むが、吝嗇については気に病むことは滅多にありません。あなたはこのことを司祭たちや、姦通者たちの中に見ることができます。司祭がひょっとして、愚かな行いをして、別段さんげもせずミサをあげるだろうか、彼は心中、悪魔が祭壇上の自分をさらっていくと思っています。しかし僧祿が多い関係でとか、聖物故売のためでとか、金目の他の物のためだとか言って、誰かが自分の吝嗇をさんげするのでしょうか。姦通する者もそれを大罪だと思っていますが、それでもなお、子豚が狼により添って森まで行き、ひーひー泣いて後からついて行くが、事は行われるのです。君の良心は、そんな事はすべきでないと、君に逆らって泣くが、君はそちらへ走って行きます。しかし君は暴利をあげ、いんちき商売をし、詐欺を働き、一つの物を他の物の中に混ぜる代わりに、他人から一ペニヒ、一グルデンを儲けても、君の良心は君に逆らっても泣きはしません。それを君は当然の権利だと思っているからです。だから罪にならない事のためよりも、より多くの人々が吝嗇のために呪われるのです。およそ人間は金を持つとほしい物を調達します。賢人は語っています。「Eccle. 10. Pecunie omnia obediunt. (コヘレトの言葉 第十章 すべての物は金に従う。)」

第百七十八話 冗談

床板の上で二つの不幸を祈ったこと

儉約家は、自分と他人のために儉約し、掻き集めた金を蕩尽できる浪費家を常に持たなければなりません。ある町の一人の町人は、その屋敷内にチャペルを持っていました。彼はその中の床板の上に跪いて、しばしば祈りました。彼は床下に壺を一個埋めて、儉約してできた金をその中へ入れ、その壺の上で祈りました。「私がこの壺を金で一杯にしたのでなければ、神よ、私を死なさないで下さい。」そしてその通りになりました。その壺が一杯になった時、町人は死にました。この女房は別の男と一緒にになりました。その時この二人は最良の物を珍しくもつかんだのです。この男は床板の下に金の入った壺を見つけ、板の上で祈りました。「私が壺に入った金を使い尽したのでなければ、私を死なせないで下さい。」これもその通りになりました。

自分が持っていない物を絶えず欲しそうに眺めたり、使うことが許されない物を持っているような、浅ましい人間どもがいるものです。こういう人たちを喜ばせるのは、桶やたんすの中にしまいこんである金だけなのです。こういう手合いは乾草の上の犬に似て、自分はその乾草を食わず、牛や他の家畜にも食わせようとせず、それらに吠えかかったり、かみついたりして追い払うのです。フランシスコ・ペトラルカは語っています。「*Apud multos ociosa pecunia est nihilique agit aliud, quam quod occupat locum atque animum, apud plures male atque improba operosa, apud paucos demum fructuosa est, li. 2, ca. 13.*（多くの人においては金は必要のないものであり、場所と心を悩み患わせるもの以外の何物でもない。金は多くの人には、悪い、さらに不正な、厄介なものであり、やっと少数の人に役に立つものなのである。第二卷十三章）」多くの人々の許では金は遊んでいて、人の気持ちを煩わせ、金の在り場所の心配をさせているだけです。また多くの人々の許で金は悪意と卑劣な心で出資されるが、それを有効に旨く使う人はまことに少ない。

第百七十九話 冗談

森の中で宝を見つけた男のこと

昔、ある男が鍬を担いで森を歩いて歩いていました。その男が樹の下で休んだ時、一枚のグルデン金貨が落ちているのを見つけて、それを拾い上げ、鍬で土を掘り、グルデン金貨が一杯詰まった大きな壺を見つけました。この男は、「自分でこの金を家へ運ぶとなると、片付くのは遅くなるだろう。その間に誰かがやって来て、金を見つけるかも知れん」と考えました。この男は同じ村の百姓たちの声を聞いたし、隣人たちが木を伐る音も聞きました。隣人たちは三人で、袋を三つ持っていました。その男は大声をあげて隣人たちに呼びかけ、各々方すまんが金貨の入った袋を一つずつわしの家へ運んでほしい、お礼はたっぷり差し上げると言いました。この男は掘って、金をかき出して袋につめました。一人の百姓が金を自分の家へ運びました。二人目の百姓も金を自分の家へ運び、三人目もそうしました。ところで金を見つけた例の農夫が家へ帰った時、自分の家の中に何も見出しませんでした。この農夫は自分のために家へ金を運んでくれた筈の百

姓たちに、あの金を何処へ置いたのかと尋ねましたが、誰もが、そんなことは何も知らんと言いました。このような次第で、この男に残ったのは、自分が金を掘りだしたという仕事だけでした。

このように吝嗇家たちにとっては、唯一の仕事となるのは、自分たちが金を集めたのだが、吝嗇家たちを法廷につき出し、金を差押さえた他人たちに対しては、その金は何の価値もなくなり、結局金に奉仕するというだけの事なのです。財宝が彼ら他人たちに奉仕する方が一層良いでしょう。彼ら吝嗇家たちの手からもれた一ペニヒ貨の方が、桶の中に詰まっていた彼らを喜ばせている四十グルデンよりも、彼らを悲しませるのです。吝嗇家たちが死ねば、彼らはその財宝の金を持って幽霊になって出るでしょう。読者の君は後程高利貸しについての処で、その例を見出します（第二百一話参照）。

第百八十話 まじめ

自分が触れるものすべてが黄金になるように願った男のこと

アリストテレスは、自分が触れるものすべてが黄金になるように願った男の話を書いています。男の願いは聞き入れられることになりました。こうして空腹のため死ぬ羽目になったのでした。男の手や舌が触れた食べ物や飲物は、すべて黄金になったからです。

それにもかかわらず、自分のためにならないものを欲することがよくあるものです。だからすべてを神に委ねることです。「主よ、私に役立ち、よいものであれば私にください」と。Domine, sicut scis et vis. (主よ。あなたが知り、お望みになるままに。)

第百八十一話 まじめ

空腹で死んだ王のこと

他の王と戦ったある王の話が本にあります。相手の王は、たくさんの金貨を宝物塔にためこんでいました。この王には、金が箱や樽にいっぱいあることが分っていました。それでも相手王は大変金が好きでしたので、十分できたであろうに、金を使って傭兵を雇うのが耐えられませんでした。敵であった王は彼の国土を取り、彼を捕虜にして金銀の入っている塔に閉

じ込めて、「おまえは自分自身より金を愛し、金を使おうとしなかった。その金でおまえ自身やおまえの国を救えたものを。さあ助けてくれと金に言うがよい」と、言いました。そして食物も飲物も牢中に入れてやらないで、「金を食うがよい」と、言いました。こうして彼は空腹で死にました。それは当然の報いというものです。

第百八十二話 まじめ

夢でイエスを食った男のこと

貧しい領民に厳しい暴君を、神が夢によって悔い改めさせようとした話があります。暴君は、聖母の祭壇の前に膝まずいている夢を見ました。大変腹がすいて、聖母様の膝から幼子を取り上げて、その頭を食いちぎり、肩まで食べ、それからすねまで、そして足先まで食べてしまいました。目が覚めると、彼はひどく恐れ驚き、夜が明けると、聴罪師のところに行き、師に夢を解釈させました。そこで師は彼に夢解きをしてやりました。幼児イエスはキリストの全身で、彼が治めているキリスト教徒たちの全体でした。頭と肩はその国の高位聖職者であり、体の他の部分は別の下層の人々であり、彼は酷税を取り立てることでそういう人々を食べたのでした。暴君は師のいうことを信じ、このことについて悔い改めました。

第百八十三話 まじめ

十字架を食べた別の暴君のこと

ある時一人の暴君が十字架のところへ来て、キリストを十字架から下ろして、その片手を食べ、もう一方の手をも食べようとしたとき、キリストはその手で彼の頬を打ち、彼は穴の中に落ちてしまった夢を見ました。目が覚め、夜が明けると、彼はその夢を解釈させました。夢解きは言いました。「あなたは僧侶たちから金を取り立てておられます、僧侶たちは神の片手で、あなたはそれを食べてしまったのです。今度はもう一方の手をも食べようとなさいました。それはあなたが庶民たちからも金を取り立てようとしているということです。あなたがこんなことをする前に、神様に殴られて、墓穴の中へ落ちることのないように注意して下さい。」それでも暴君は少しも悔い改めようとはしませんでした。しかし彼は暴政をしようとし

たアハブ [列王記三 第二十章]¹ や、暴政に失敗した、誰も満足させられなかった他の多くの人々とともに、事を成す前に死んでしまいました。

第百八十四話 冗談

ヴェスパシアヌス²がまんまと計略に加わったこと

エルサレムを包囲し、ひどくけちであったヴェスパシアヌス皇帝の話がものの本にあります。一人の男が、皇帝と二人きりで話し合い、自分の大事を告げるために、皇帝の前に出たがっていました。ところで皇帝の部下たちは、この男が皇帝の前に出られないように妨害しました。それで御者が馬車に乗り込もうとしたとき、男は皇帝の御者のところへ行き、彼に四十ドゥカーテン与える約束をしました。御者は男に手を貸そうとして、言いました。「皇帝は今日外出されます。私が鍛冶屋の家の前へ来たら、蹄鉄が一つ取れたと、言いましょう。そしたら馬車のところへ行って、お前さんの必要なことを言いなさい。」御者が計画したようになりました。

帰ってくると、皇帝は言いました。「私は鍛冶屋の前でおまえの計略にちゃんと気づいていたぞ。私も一緒に計画に加わることにしよう。」それで御者は皇帝に賄賂の半分を差し出さなければなりませんでした。しかしもう一方の男はこの件を決着させたとき、彼にとっては安上がりなことでした。

第百八十五話 冗談

ヴェスパシアヌスが彼の兄弟と話したこと

ヴェスパシアヌスの屋敷に一人の男がやって来ました。彼は皇帝のところへやって来て、自分の兄弟に役人の職を与えてくれるように頼んで、他の人が差し出すものは、出すつもりですと言いました。皇帝はよく考えて、この男がかくも熱心に頼んだ男を迎えにやり、その男に言いました。「そして私がおまえを役人にしてくれるよう、これほど熱心に口添えをするよう

1 かつてサムエル記上、下と列王記上、下は一つになっていて、列王記1、2、3、4となっていた。列王記3とは現在の列王記上のこと。

2 Vespasianus (9—79) ユダヤ反乱鎮定の総指令官として戦果を納め、のちローマ皇帝(在位69—79)になった。

にするのに、何をおまえはあの兄弟に約束したのか。」その男は言いました。「彼は私の兄弟ではありません。役人の職が私のものになれば、彼に三百グルデンやる約束をしたのです。」皇帝は言いました。「その金を机の上にだしなさい。それでこの件は決った。」男はすぐに金を払いました。こうして皇帝は彼に証明書を与え、男は役人になりました。この男のために口添えをしたあの男は事の次第を知らず、ある時皇帝のところへやってきて、兄弟のために役人の職を頼みました。皇帝は言いました。「行って、他の兄弟を捜すがよい。おまえの話している男は私の兄弟だからだ。」こうしてあの男はもう決して頼みに来ませんでした。

第百八十六話 まじめ

虫が刺すという教えのこと

これは皇帝チベリウス賞賛の話です。彼はことを行うのに慎重にゆっくり行い、代官たちを長くその職に留めておいて民衆をいたわりました。彼はこの状態を変えることはありませんでした。しかし代官が死んだり、死ななくても大きな苦情が出て来た時には変えなければなりませんでした。皇帝の顧問官や家来は、そのことで皇帝を非難して言いました。「ある人が一人で持たねばならない場合でも、別の人がいくらか手に入れてもいいのではありませんか。」皇帝は言いました。「それは庶民には役に立たず良くない。新しい役人が多いと、庶民を痛めつける。飢えた虫がいて、ひどく刺すのだ。」次の例でそのことに気付いて下さい。

一人の膿疱だらけの貧しい男が、日向で横になっていました。この男は蠅を追い払うことができないほど弱っていて、大きな蠅が一杯たかっていました。ある時彼のそばへ一人の男が歩み寄り、彼を哀れんで、蠅を追い払いました。この病人は言いました。「ああ、何という大損をさせたのだ。虫は今満腹していて、そっと私を刺していた。しかし今度は飢えたやつがやって来て、ひどく刺すだろう。」役人に関してもこの通りです。さらに貪欲な旦那衆もなんんかはいます。その管理人や役人が金持ちになり、多くの財を手に入れると、偉い方々は言いがかりをつけて、それを取り上げ、彼らをパンのスプーンにします。スプーン代わりにしたパンは、使えなくなると食べられるのです。

第百八十七話 冗談

ヴェスパシアヌスがテヴェレ川に投込まれねばならないこと

ある時、ローマ人の有力者が埋葬され、六十グルデンの費用がかかったということが話題になりました。皇帝ヴェスパシアヌスは、自分が死んだら、埋葬の費用はどれくらいかかるのかと尋ねました。彼の管財人である収入役、あるいは出納役（当時そう言われていました）が、「三百ドゥカーテンです」と言いました。すると皇帝は言いました。「三百ドゥカーテンを数えて余に渡せ。死んだら余をテヴェレ川に投込み、葬式は行わない。」

彼はこの様に貪欲でしたが、名誉には従いました。さらにここで取り上げておきたいことが二つあります。彼の貪欲についての話ではありませんが、いずれにせよ彼のことを口にしてはいるのですから、二つのことを話すことにしましょう。

第百八十八話 冗談

ある婦人がヴェスパシアヌスにキスをしたこと

一人の婦人がいました。いうまでもなく彼女は皇帝を好きになり、皇帝を見ることができると、嬉しく思いました。ある時皇帝は彼女の家の前を歩いていたか、あるいは彼女の家の前で腰を下ろしてしていました。するとこの婦人は、皇帝の首に抱きついてキスをしました。皇帝ヴェスパシアヌスは、一人の婦人が自分に非常に好意を抱いているということ、恐らく耳にしていたので、収入役に、当時の呼び方では出納役に言いました。「彼女に六十ドゥカーテンを与えよ。」この婦人は喜んで金を受け取り、それを持って立ち去りました。その後出納係が皇帝ヴェスパシアヌスに、この金をどのように帳簿に記入したらよいのか尋ねますと、皇帝は言いました。「こう書いておけ、Vespasiano adamato. (恋慕われたヴェスパシアヌスに) 恋人のヴェスパシアヌスにと。」

第百八十九話 冗談

流れ者の道化がヴェスパシアヌスを簡潔に歌ったこと

これも皇帝ヴェスパシアヌスの話です。フランシスコ・ペトラルカは皇

帝のことを書いて、ペニヒ銅貨に刻印された皇帝の顔のことを話しているのですが、彼の顔はいつも便所、あるいは厠（当時こう言っていました）で座り、腹を空にしようとして、力まなければならぬ人のように見えました。それほど彼はいつも気難しい顔をしていたのです。ある時、皇帝ヴェスパシアヌスが諸侯と食事をしていた食卓に、流れ者の道化師がやって来ました。彼は短詩を作り、皇帝ヴェスパシアヌスと一緒に食卓についていた人を全て、自分の詩句や短詩の中で歌い上げました。そしてこういう道化ならうまく言うものですが、お歴々の一人一人に、なにがしかの表現をしました。しかし皇帝には敬意を払って何も言いませんでした。それで皇帝ヴェスパシアヌスは言いました。「おい、余にも何か言え。」道化は言いました。「もしあなたがお腹の掃除をお止めになるなら、歌いましょう。Cumalvum purgare desieris.（あなたが腹の掃除を止めるなら。）」それで皇帝はもう一発食らったのでした。

第十七章 高利貸しについて

第百九十話 冗談

自分と同じ仲間なら持上げることのできたということ

一人の高利貸しが死にました。この男は重くて、誰一人持上げることができませんでした。それである人が言いました。「いくつかの地方では、仕立屋とか陶工とか同じ職業の人が、死人を運ぶ習慣がある。しかしこいつを運ぶには、四人の高利貸しに来てもらえ。四人でこいつを持上げて運べるか、なにか賭けるやつはいないか。」四人が呼ばれましたが、彼を軽々と羽毛のように持上げました。

第百九十一話 冗談

悪魔が高利貸しを引きずること

高利貸しが説教を聞いていました。説教から出て来ると彼は腹を立てて、悪態をつきました。この高利貸しを見知っている若者が、彼に出合っかけて話しかけました。「旦那、あなたはなぜそんなに怒っているのですか。」高利貸しは言いました。「修道士に腹を立てているのだ。やつめは、悪魔が

高利貸しを皆、地獄へ運んで行くだろうと説教しおった。」若者は言いました。「それは間違っています。私に分厚いペニヒ貨を一枚下さい。皆がいる前でその修道士に抗議しましょう。そして彼は正しいことを言わなかったと言ってあげましょう。」高利貸しは若者に分厚いペニヒ貨を与えました。若者は教会の中へ入って行って、説教壇の前に立ちました。高利貸しも入って行きました。若者は説教師に向かって言いました。「説教師様、あなたは悪魔が高利貸しを地獄へ運んで行くだろうとお説教なさいましたか。」説教師は、「そうです、そのとおりです」と言いました。若者は言いました。「それは真実ではありません。」説教師が言いました。「なぜですか。」若者が言いました。「だって、悪魔は高利貸したちに、彼らを運んで行くなんて、そんな大きな名誉を与えはしないでしょ。悪魔は彼らの足を掴んで引きずり込むでしょうから。」それで皆が笑いました。そして、若者は金を手に入れましたが、高利貸しは余計に怒ってしまいました。

第百九十二話 冗談

近づけなかった高利貸しのこと

一人の高利貸しが説教を聞いていました。その時、説教師は高利について、それがどんなに大きな罪であるのか、そして高利の罰について大変厳しく説教しました。説教の後で高利貸しは、説教師を呼びにやって、言いました。「司祭殿、さあ、私はあなたに一グルデン差し上げます。時々、あなたが今された以上に高利のことを非難して下さい。」説教師は言いました。「でも、あなたも高利貸しの一人だと言われていますよ。」高利貸しは言いました。「それは本当です。私は他の高利貸しの手前近づけないのですよ。だから私は、私も加わることができるように、彼等に去って欲しいのですよ。」

それ故に、この男は次のことを正しく言ったのです。すなわち、地上に四つの職業の人が十分にいません。司祭が十分にいません。そうでなければ一人の司祭が六つも、七つもの聖職禄を持つ必要がないからです。貴族も十分ではありません。さもなければ百姓が皆が皆貴族になりたがりたはしないでしょ。娼婦も十分ではありません。そうでなければ主婦や、尼僧が娼婦の仕事をする必要がないでしょう。ユダヤ人も十分にいませ

ん。さもなければキリスト教徒が高利貸しをする必要がないでしょう。

第百九十三話 冗談

高利貸したちが返事をしなかったこと

ある時説教師が高利貸しに抗議して説教をしていました。説教の最中に彼は言いました。「皆さん、私はあなた方に高利貸しの卑劣さをお見せしたい。では、私が名を挙げる職業に従事している人は、私に返事して下さい。ここに仕立屋さんはいますか。」仕立屋たちは言いました。「はい司祭様、私たちはここにおります。」「靴屋さんはここにいますか。」靴屋たちは、はいと言いました。「刑吏はここにいませんか。」刑吏は、おりますと言いました。「ここに皮剥ぎ人はいませんか。」皮剥ぎ人たちは、おりますと言いました。最後に説教師は尋ねました。「ここに高利貸しもいるのではありませんか。」その時、彼に答えるものは誰もいませんでした。それで説教師が言いました。「御覧なさい。高利貸しを営むより卑劣な職業はないのです。というのは、彼らは恥入っており、しかも他にどんな職業にもつけないのですから。」

第百九十四話 冗談

説教師が祝福を受けたこと

別の説教師がおりました。この人は説教をしている時に、いくつかの職業に特別に祝福を与えたいと言いました。それで彼は言いました。「パン屋さんたち、一緒に立ち上がって神の祝福を受けなさい。」パン屋たちは立ち上がり、そちらへ歩いて行きました。こうして説教師は沢山の職業を呼び、彼等と一緒に立ち上がって神の祝福を受けました。最後に説教師は言いました。「高利貸しの人々は立ち上がって神の祝福を受けなさい。」けれども誰も立ち上がろうとしませんでした。誰も立ち上がろうとしないので、説教師は言いました。「私は、ここに高利貸しがいるのに、神の祝福を受けるために立ち上がろうとしないことを、知っています。それならそのままじっと座っていなさい。そして、最後の審判の日にあなた方を襲うであろう、神の呪いを受けなさい。」

第百九十五話 冗談

剃りよい髭を生やしていた高利貸しのこと

ある国に一つの習慣があります。つまり、人が死んでも人々は死人を家から運び出しません。その前に、誰かがやって来て死人のことを、その人が備えていたいくつかの徳のために嘆いたり、誉めたり、賞賛したりしなければならないのです。ある時高利貸しが死にましたが、世間の人々は皆彼を嫌っていました。また彼は多くの敬虔な人々を墮落させましたので、彼のことを良く言う人は誰もおりませんでした。彼が死んだ時、彼を誉める人は誰も来ませんでした。彼が誉められなければ、埋葬もできませんでした。ついに彼の床屋がやって来て、高利貸しが土に葬られるようにと手伝って、「私はこの人の髭ほど剃り易い髭を剃ったことはありません」と言って、褒めました。それで人々は死人を運んで家から出ました。さもなければ死人はまだそこに横たわっていることでしょう。

第百九十六話 まじめ

地獄へ連れて行かれた男のこと

ある時高利貸しが死にました。親戚の者たちは彼を墓地に埋葬しようとしてきました。すると司祭が、当然そうすべきでしたが、それを許可しませんでした。というのは、その土地は清められており、神のものだからです。悪魔の手に落ちた人は誰もそこには葬られるべきでないからです。De usuris ex concilio Lugduensi, und ist Gregorius. 10. (リヨン公会議の慣習から、これはグレゴリウス十世の時である。)それで親戚の者たちは彼を道路に埋めようとしてきましたが、それを国王の出納係も許そうとせず、言いました。「この土地は王様のものだ。ごろつきは王様の土地に葬られるべきではない。」するとそこに悪魔が立っていてこう言いました。「その人を私に下さい。私がその人にふさわしい墓場のある所へ運んであげましょう。それは地獄です。」そして悪魔は死人を受け取って、死体と共にそこから去って行きました。それが高利貸しの領域でした。そこへ行くのが彼にはふさわしかったのであり、そこに埋葬されるべきだったのです。

同様の例や他の大きな徴しるしを、神は高利貸しと彼等の埋葬の辱めのために

示されるのです。

第百九十七話 冗談

絞首台に連れて行かれた男のこと

ある時一人の高利貸しが死にました。その時、司祭と高利貸しの親戚の者たちが互いに、埋葬のことで反目し合いました。司祭は言いました。「皆さん、死体を前部の開いた車に載せて、車の前に二頭の雄牛をつなぎなさい。そして神に任せましょう。牛たちは、神がその死人の墓場だと望まれる所へ車を引いて行くでしょう。」それは親戚の者たちの気に入りました。こうして二頭の雄牛は、いかなる人間の指示も受けずに、絞首台の下へ行き、そこからもう動こうとしませんでした。神はそこに死人を葬るおつもりでした。高利貸しは地上で盗人のように振舞っていました。だから、盗人が葬られる所に、高利貸しとその同類は葬られるべきなのです。

予言者は言っています。「Jeremia 22. Sepultura asini sepelietur.（エレミヤ書第二十二章。ろばが埋められるように埋められる。）

第百九十八話 まじめ

パンを求めなかった修道士のこと

フランスはゼボンの町に一人の高利貸しがいました。修道院ではドミニコ会の人々にパンも無くなったと聞き、籠にパンを詰め、それを修道院長のところへ届けるようにと、かれの下僕に命じました。さて、院長はその下僕に言いました。「これはもと通りそなたの主人の家に持ち帰りなさい。あの人は自分の財産を持っておりません。あの人の財産はすべて他人の財産なのです。そのような他人の財産の中から喜捨をなさってははいけません。」高利貸しはこのことを聞いて、心を入れかえ、ひとに物を乞う身にまで立ち戻ったのでありました。

聖職者たちが高利貸したちにおもねって、金品を貰ったり、ともに飲み食いをしたり、さらにこのような人々から、思いのままに喜捨や献金を受け取れるような特権を教皇から獲得することを止めて、すべての高利貸しや、不正に財を成したその他の人々に真理を説いて、彼等を改心せしめ、救済されるように仕向けたら、どれほど立派なことでありましょうか。

第百九十九話 まじめ

金貸しの財産が消え失せたること

或る修道士がほかの何人かの修道士たちといっしょに、富裕な男から招待を受けました。修道院長が食前の祈りを捧げることになって、彼はこのように唱えました。「正しい心ばえと浄財によってここに差し出された物を神よ祝福したまえ。またこれを味わい、食せんとする人々の為、豊かにして十分なる恩寵が授けられますように。もしこれが神によって是認されぬ物であるなら、風のように消え去るがよろしかろう」と。院長がそう唱え終わるや、食卓の上にはもう何一つとして残っていませんでした。銀の食器や他に装飾品がそこにあったのですが、何もかもが消えてしまったのです。亭主はこれを見て、心を入れかえ、信仰に立ち帰ったのでありました。

第二百話 冗談

不浄の財と色恋沙汰で地獄に墮ちる多くの人々のこと

海の向こうで悪魔に取り憑かれた男のお祓いが行われました。この時、司祭は悪魔に尋ねました。「どのような罪科のゆえに、お前は人間を誘惑してそれをこのうえない喜びとするのですか」と。悪魔は言いました。「不当に財産を稼いだり、不貞を働いたりするからですよ。人間が不当な財産を手に入れるよう、そこまで漕ぎつけさえすれば、そ奴はもう我々の手に落ちたものと確信しています。不正な財産にはまりこんだら、正しい信仰に戻れるのは千人に一人もいやしないからです。それと不貞の件ですが、人間どもがその罪障をきっぱり断ち切ることは稀でして、ややもすれば追憶と悦楽に心を煩わしているからです。」

第二百一話 まじめ

信仰に立ち戻れぬ男のこと

一人の高利貸しがおりました。命数も尽き、もうこれが最後というときに、信仰に立ち帰って魂の救済を求めるよう、親戚の者たちから忠告されましたが、高利貸しはその様なことには耳を貸さぬ風でありました。縁者

がそのことで彼に懇々と話した時、彼はもうこれ以上我慢ならない風情で言いました。「いまの心のままでは信仰に戻ることなどできやしないさ。私に別の心を呉れないか。」

とかくお金や物などは、囊の中にたまると、もう二度と再び出てくることは無いとしたものであります。

第二百二話 まじめ

物欲は回心の妨げになるということ

ある信心深い男の人が、利得を計って金を貸し与えるべきかとの誘惑にかられた時、いつも「私はもうそれを手に入れても、天の至福にあずかるにはまさに、今日、明日にもそれを元に戻さねばなるまい。その様な財産作りはもう途中で止めてしまうほうがいっそ善いというものだ」と、自分に言い聞かせ、その惑いに打ち勝ったのであります。

賢人はコヘレトの言葉、第九章で「Sicut capiuntur pisces.（あたかも魚たちが捕らえられるように）」と、言っています。魚が釣り針や網で捕らえられるように、人間は俗事や貪欲によって捕らわれてしまいます。いや、人間というものはまこと、魚よりもずっと愚かしいものであります。何故ならば、もし魚が釣り針や網を見つけたら、決してそれに引っ掛かることはないでしょうし、あるいは、もし捕らわれてしまったとしても、でき得べくんばそこから再び解放されたく思うことでしょう。しかし、貪欲な人々はそのどちらの道も取らないのです。キリスト者なら、不浄の財を蓄えることがいかにおぞましい事か知っています。あるいは悟ることもできましょう。説教を聞きに行くほどの気持ちが彼らにはあるのですから。それなのになおかつ、財産を不正に手に入れることになったら、かれらはこれをただ手にいれてしまっただけで、捕らわれの身になってしまったのですから、然るべく回心によって自分をもとのように解放し、告解によって罪をわが身から振り払い、わが心を元通り健全なものにすることができます。だが貪欲な人々はそのどちらも選びません。万が一、その者が浪費家で、気前よくたっぷりと金を出すようなことが起こるかもしれません。その時彼は回心したくとも、それを果たさず、悪い所業に走ってしまったことから、自分が回心するよりはむしろ慈善を施したということ

ありましょう。言うなれば彼は貪欲かつ吝嗇な人で、心の中に入って来たものはこれを閉じ込めて、もう二度と外には吐き出さないのです。こういう人々は地獄に近いところにいるのです。「箴言の一、Degluciamus eum. (その者を、私たちは呑み込むことにしよう。)」一度捉えたら決して逃がさぬ地獄の様に、私たちはその人を呑み込んでしまおう。ちょうど水に溺れる人間が掴んだ物を決して手放さないように。

第二百三話 まじめ 遺言執行者が打ち殺されたこと

およそなんたりとも、死後返却してくれるようにと、財産をその親戚縁者や遺言の執行人に依頼すべきではありません。これは先ごろメッツで起こったことですが、ここにも一人の高利貸しがいて、今はのちに、自分の死んだ後、財産は書き出しておいた通りに返却してくれるようにと、或る男に託し、この人も高利貸しに対してその旨の誓約をいたしました。そこに高利貸しの二人の息子がやって来て、二百グルデンという大金を持参のうえで、これを差し上げるから父の遺言書を自分たちに執行させて貰いたいと男の人に言いました。くだんの男は言いました。「あなた方のお父上は、私に魂を委ねられたのです。あなた方には信頼を置こうともしませんでした。私にはそれは出来ません。もしそんなことをしたら、お父上にも、私にもまた貴方がたにも、天罰が降ることでしょう。」二人の息子はピラートゥスの前に出たユダヤ人のように言いました。「私たちがその罪を引き受けます。」敬虔なその男は同意しませんでした。それで二人のうちの片方の息子がその男を打ち殺してしまいました。

これが父親を愛していた信心深い息子たちでありました。哀れな父親はあの世で、息子たちを豊かにしてやるというこの世での大仕事を喜ぶことができるのでしょうか。もし父親が彼らに後事を託していたら、彼らが父親のために良かれと願って実行したのでしょうか。皆さんはどうお思いになりますか。とかく女房や子供たち、親戚の連中に魂の救済を託す人々は愚かな人々なのです。彼らがどのようにやるかは貴方が毎日のようにご覧になる通りです。

第十八章 姦通について、立派なご婦人方について

第二百四話 冗談

十二人の子供と十二人の父を持つ女のこと

フランシスコ・ペトラルカは、ブリタニア¹に住んでいた一人の男のことを書いています。男には娘が十二人おりました。たまたま、妻が病に倒れました。妻は余命いくばくもないと感ずると、夫を呼び寄せて、言いました。「ねえ、あなた、いよいよ死ぬとなると、誰でも本当のことを言うのが、世間の習わしです。書記と公証人と証人を呼んで下さい。始めてのことをお話ししましょう。」

準備万端整い、書記が来ると、妻は話しを始めて、こう言いました。「あなた、私には十二人の子供がいますが、あなたが間違いないと固く信じている一番上の子供だけがあなたの子です。というのは、私最初の年はおとなしくしていましたが、その後、あなたはめったにそばに来てくれないし、私に噛むものやちぎるもの²、食べるものや飲むものがあるかどうか、殆ど私のことに構ってくれませんでした。それで、私はできるままに、何とか暮らしを立てて来ました。とりわけ、二番目の子供は貴族の子です。」そこに、これもこの女の子供ですが、一人の小娘がいて、部屋の外で火にあたりながらチーズとパンを食べていました。小娘は、母が一人一人の子供に別々の父親を与えるのを聞くと、チーズとパンを放り出して、部屋へ駆け込み、ベッドの前に跪き、ベッドの上に両腕を伸ばして、言いました。「お母さん、兄さんや姉さんの一人一人に別々のお父さんをあげるのなら、私には、私を立派に育てることのできるお金持ちのお父さんをちょうだい。」その子供の番になると、母はその子供に金持ちの商人を与えて、その名前を挙げました。子供は言いました。「お母さん、ありがとう。お母さんは、私を立派に育てることのできるお金持ちのいいお父さんをくれました。（子供はその男の噂を聞いていたのでしょうか。）さあ、これから、チーズと

1 イングランドとスコットランドのローマ時代の呼び名。

2 「噛む肉やちぎるパン」の意。

パンをお腹一杯食べに行こう。お金持ちのお父さんがいるんだもの。」

この女には十二人の子供と、その上十二人の父親がおって、本当のことを言いました。ところが、わが立派なご婦人方は一人の子供に十二人ほどの父親を挙げ、その一人一人から四グルデンとか六グルデンとか脅し取って、言うのです。「私子供ができたの。あなたのせいよ。絶対にあなたの子だわ。」おやおや、宗教界にも俗界にもご立派な殿方がいるらしく、世間の恥さらしを恐れて、こう考えます。「裁判になると、女たちには大きな特権がある。金で隠せるのなら、安いものだ。」そして、女に六グルデンを与えます。すると、女はほかの男の所へも行き、同じことを言い、こうして、男の所を渡り歩いて、最後に、その子に一人の男をあてがいます。もしその子が鶯鳥だとすれば、羽根一本もその男のものではないでしょう。そこで、新しい袋¹が必要になり、袋は次々にほかの袋に押し込まれて、水の中へ投げ込まれます。

第二百五話 まじめ

一方の側からす麦粥を置くこと

実直な女を立派に育てるのは男ですが、その男が、ここに挙げる男のように、実直でない女を立派に育てることもあるものです。男が、そういう男も何人かおりますが、妻の所において、働いていけば、妻もできるだけのことをするでしょう。ところが、男が戦争に行って、妻子をほったらかしにして置こうというのは、女に盗みをしろと言うのでしょうか。あとには、数人のごろつきが家に残って、夜昼呑み屋に入り浸り、ばくちを打つやら、大酒飲むやら、何もしないで、家でも酔っ払っていようという始末。女は男を養わねばならない。そして、男たちは女たちに何か気づくと、死ねばいいと思う。女たちは自分の衣類を質に入れなければならなくなる。それでも、これよりましな、真面目な男も少しはいますが、この人たちは、あの連中はただ酔っ払っているだけだから、一体何をしているのか、どうしてそうなるのか、一向気かけないのです。

1 原語 Sack には「ふしだらな女」の意味がある。「こういうふしだらな女は入れ替り立ち替り現れて後を絶たない」の意か。

さて、一人の女がおりました。ある時、食事の支度をして、食卓の一方の端からす麦粥と水を入れたジョッキを置き、もう一方の端に焼き鶏と白パンと上等のぶどう酒を入れたポットを置いて、夫に言いました。「さあ、あなた、食卓の好きな場所に座っておくれ。からす麦粥の所に座るつもりなら、あなたが働くお手伝いをしましょう。あなたも働く気になれば、爪から血が出てもいい¹。鶏の所に座るつもりなら、私もそういう物が手に入る所に行かせておくれ。」夫は言いました。「好きな所へ行くがいい。おれは鶏とぶどう酒の所に座ろう。」

あなたは、妻が浮気をしに出かけようとするときなどに、玄関の戸を、夜になると、ぎいぎい音を立てないように、開けるいたずら者たちを見つけるべきでしょう。

第二百六話 冗談

皇后、ヴィルギリウス²の造った口に手を入れること

ヴィルギリウスはローマで、石に人の顔を刻みました。そこでは、誓いを立てた人々の真偽が証明されました。不正の誓いを立てた人が、その口に手を入れると、顔はその手を噛み切るのです。正しい誓いを立てた人には、何も起こりません。こうして、大ぜいの人々が、偽誓をしたことを認めさせられました。たまたま、ある皇帝が、皇后が一人の騎士と情を通じているのではないかと、疑いをかけました。皇帝は、自分に何か言われると、しばしば皇后を叱りつけました。ある時、皇帝は言いました。「お前、どうも様子がおかしい。お前がヴィルギリウスの石の前で、誓いを立て、手を口に入れて、身の証を立てようと思うなら、わしはお前の言うことを信じよう。」皇后は承諾しました。それを行う日が決められました。

さて、その日になって、皇帝が騎士の一団を従えて現れると、皇后も護

1 精出して働くときに、「血が爪にのぼる」とか「爪から血が出る」などの表現がある。

2 ローマの詩人 Virgilius (Vergilius) (BC70—BC19) は、中世文学に多大の影響を与えたが、12世紀になると、古代あるいは東洋に起源を持つ様々な奇談が彼の名前と結びついて、「魔術師ヴィルギリウス」と言われた。16世紀初頭には『ヴィルギリウス奇行集』というフランス語の民衆本まで出ている。

衛の侍女たちを従えてやって来ました。ローマの市民も殆どすべてが馳せ集まって、大騒ぎでした。こうして、行列が進んで行くとき、道化服を着た一人の道化が来て、並み居る女たちを押し分けて近寄り、皇后やほかの女たちの首を抱いて、公衆の面前で接吻しました。皇后は泣いて、身も世もあらぬ有様でした。道化は姿を消しました。皇后は、そばに皇帝が立っている石の所へ来ると、こう言って誓いました。「ただ皇帝と、公衆の面前で私を辱めたあの不吉な道化のほかに、私の身体に触れた男の人はごさいません。これにうそ偽りのないことを誓って、いまこの口の中へ手を差し入れます。」そして、長い間入れていました。これで、皇帝は貞節な皇后を持っていることになりました、云々。皇后の誓いは正しかったのです。道化は、例の騎士が道化服を着ていたのです。

この実例は、多くの点で役に立ちます。例えばよく身を守り、それに注意せねばならないということが誰にでもよく分かります。

ある時、一人の男がペトラルカの所へ来て、妻が浮気をして夫婦の誓いと誠実を破った、と訴えました。ペトラルカは言いました。「あなたは、ほかの人々はともかく、妻に対して誠実を破ったことがないかどうか、考えてみなさい。姦通ほど当たり前のことではない。あなたは妻を独り占めしたいのですか。どんなに身分の高い人々でも、そういう目に遭うのは、今に始まったことではない。いや、大昔でも、それを我慢せねばならなかった。そばに娼婦を寝かしていた貴族や君主、国王や皇帝の名を挙げましょうか。クラウディウス¹は皇帝だったが、二人の女がいた。二人とも娼婦だった。一人はメッサリーナという名前で、皇帝の所から出ると、急いで娼家へ行き、話すより黙っているほうがよい事をしていました。どんなに偉い国王や皇帝でも我慢せねばならなかったことを、我慢しようとしないうことが、思い上がりでないかどうか、考えてごらんください。しかし、それはともかく、あなたと苦しみを共にしてもらうことが、あなたの苦しみや悲しみを軽くすることになります。万能の神もすべての事について自由

1 Tiberius Claudius Drusus Nero (BC10—AD54)。ローマの第4代皇帝。Messalinaはその最初の皇后であるが、のちに愛人 Caius Silius と通じて死罪に処せられたことなどから、この話のように解釈されることもあったのだろう。

に振る舞うわけではない。Rapida libido.（情熱は身を焼き尽くす。）神と結婚している助修女や修道女が選ばれます。女たちの姦通は Nec permitti, nec prohiberi potest.（我慢することはできないが、さりとて避けることもできない）のです。」

第二百七話 冗談

皇帝アントニウスが不貞を働いた皇后を我慢したこと

皇帝アントニウスはある女性と結婚しましたが、この女性は尻軽でした。身内のものは彼に、彼女を叩き殺すか、追い出すように言いました。皇帝は答えました。「叩き殺さねばならないとなると、それは残忍すぎる。叩き出さねばならないとなると、彼女に朝の贈り物¹と、彼女が私のところに持って来たものを与えねばならぬ。」それはローマ帝国のことでした。そして言いました。「我慢するにしくはなしだ。」

それ故結婚生活というものは、このように不愉快な状況です。うまく炒られてはいるが、沢山の蠅や蚊が中に入っているオートミールにたとえられるでしょう。夫が自分の気に入らない妻に、六匹の蠅を見つけると、妻は気に入らぬ夫に、二十匹の蠅を見つけるものなのです。それですから忍耐しなければなりません。聖者ベルンハルトは、ある偉い方への書簡の中で、家政を取り仕切る方法を述べ、そのように言っています。フランシスコ・ペトラルカも de remediis fortune（財産の薬について）の多くの章で語っています。

ある人がペトラルカに言いました。「私はある女と結婚しようと思えます。」「誰と結婚しようというのだ。」「ある生娘と結婚しようと思っているのです。」「多分お前の望むようになるだろう。」「私は以前夫のいた女と結婚しようと思えます。」「彼女の望むようにやりなさい。」「私は以前二度結婚した女を妻にしようと思えます。」「それなら彼女は刀を差しているぞ。」「私は話のうまい女と結婚しようと思えます。」「彼女は黙っていることができるだろうか。」「私は金持ちの女を妻にする積もりです。」「食欲が金を妻にするのだな。」「私は美人と結婚する積もりです」「人々が好み、求めて

1 昔のドイツの習慣で、普通結婚初夜の翌朝、夫が妻に与える贈り物。

いるものを守るのは難しいぞ。」「私は醜い女と結婚しようと思います。」「誰も望まないものを持つには、忍耐がいる。」「子どもを沢山産む女と結婚しようと思います。」「沢山の子どもを持つのは、重い荷物で、子どもが小さければ心配も小さいが、子どもが大きくなれば心配も大きくなるものだ。」「子どもを産まない女と結婚する積もりです。」「実のならない木はなんになるのだ。」

このように悪魔というのは、あらゆる場所に、薬草の中にもいるのです。美しい女と結婚する人は、長くその女を愛することはないものです。なぜなら美人薄命であるからです。三月の花、冬の晴れ間、満月、favor populi (人々の好意)、神父の争いが長く続かないように、美しさは長続きしないのです。

第二百八話 冗談

グラチエース・イスシュマル¹と呼ばれた子供のこと

ヴェニスに一人の商人がいました。彼は時々不在で、人々が東の異教徒の国へ出かけるときのように、一年か三年家にいませんでした。ある時そのように長く家を空けていましたが、帰って来ると、可愛い男の子が家の中を走り回っているのを見いだしました。その子は白い髪をしていました。この男が言いました。「この子は誰の子だ。しかし本当に可愛らしい子だ。」妻が答えました。「旦那様、私の子です。この子がどうして生まれたかという、大事件を申し上げた方がよろしいでしょうか。冬私は庭を歩いていて、あなたのお傍にいたいという思いにひどく駆られて、あなたのことを考えておりました。そして屋根からつららを取って口にしますと、この子供が生まれました。その証拠として、グラチエース・イスシュマルと名前をつけました。」この男は黙って、それ以上問題にしようとはしませんでした。なぜなら夫が妻を侮辱すれば、その前に自分が侮辱されるからです。彼はまた思いました。「お前が妻の傍にいたならば、こんなことは起こらなかったろう。お前がどこかで異国の壺を壊すと、彼女は家でかめを壊

1 原文 Glacies Ißschmarr。Glacies はラテン語で「氷」の意。Ißschmarr は現代語では Eisscholle あるいは Eisschmarre で「氷の塊」、「つらら」の意。

していたのだ。」このイスシュマルは、こうして成長し大きくなりました。

この父親がある時妻に言いました。「少し勉強させるために、おれたちのグラチェース・イスシュマルを、一度一緒に連れて行こうと思うがどうだろうか。」妻は言いました。「この子には気を使って下さいよ。」夫はその子供を連れて出かけ、海の上で売り飛ばしてしまいました。長旅の後再び故郷に戻ってきましたが、子供は帰って来ませんでした。妻は言いました。「ああ、イスシュマルをどこに置いて来たんですか、私たちの子を。」夫は言いました。「息子のイスシュマルに奇妙なことが起こったのだ。ある日、おれたちが洋上を航海していた時、とてつもなく熱い日があった。わしは帽子を被らないで船にいることを禁止したのだが、あの子はそれを守らなかった。それで太陽が頭に照りつけて、あの子は溶けて、海の中に流れてしまったのだ。あの子が水から生まれたように、また水に戻ってしまったんだよ。」

このように夫婦というのは、結婚生活で、お互いに騙し合うものなのです。

第二百九話 冗談

腰元が近習を去勢鶏と呼んだこと

お城やご殿では、情事があると、重大視されました。そこでは節操を守らねばならず、誠実に仕えることを約束する時に、このことをも誓わねばなりませんでした。ところが、二、三人の腰元が身ごもるということが起こりました。城主は、騎士や近習たちに向かって言いました。「皆の者、お前たちが腰元を辱めて娼婦にしたということは、誠実に仕えるということであるのか。」家来たちが言いました。「殿、そのことは私どもの責任ではございません。彼女らは、なんだかんだと言って私どもを悩まし、嘲笑しました。私どもが彼女たちの前へ行くと、『玉なし、玉なし』とはやし立て、去勢した食用鶏に見立てました。それで去勢されていないことを、雄鶏であることを教えてやったのです。」こうしてこの城主は、淫らな男女を、雄鶏と雌鶏を城から追い出したのでした。

こういうことは家庭の中でも起こっています。下男が下女と、そればかりか奥さんが下男と、旦那が下女と戯れる有り様です。下男がまじめにや

ろうとしても、女たちが挑発します。彼らがすれ違うとき、女が肘で下男の脇腹を突つき、時には下男がそういうことを奥さんに行うと、彼女は言います。「お前、落ち着きがないね。旦那様が禁止したことを知らないのかい。」そして恐らく実行されます。あなたが可愛い奥さんを持ったとしても、裏通りを歩いて、髪を縮らせて、女たちのご機嫌を取る追い剥ぎのことで心配することはありません。しかし下男たちには、彼女のことで気を使いなさい。そして厩舎を掃除したり、台所で皿を洗っている人たちや、煙突掃除にも心配して下さい。どうしてでしょうか。火が出て水がなければ、汚水でも火を消すものなのですから。

第二百十話 冗談

ローマ人の不快な息のこと

ローマの議会、つまり元老院に一人の男がいました。その男は、誰もその臭いに耐えられないほど、不快な息をしていました。そこで誰もその男の傍に座ることを望まず、その男から逃げ出しました。ある時男は、議員の一人に、どうして人々が自分からこんなふう逃げ出すのかと、尋ねました。議員は答えました。「あなたは人々が耐えられないほど、鼻持ちならない息をするからです。」男は家へ帰ると、妻を殴ろうと思い、妻にとて腹を立てて言いました。「おまえはどうして、わしの息は嫌な臭いがすると言わなかったのか。」妻は言いました。「私はあなたの息が、嫌な臭いがするかどうか知りません。男の人は皆、そんな臭いがするのだと思っていました。」

この人は貞淑な妻で、息を嗅ぐことが出来るほどに男の人に近づいたことはなかったのです。でも私たちの妻や娘たち、彼女たちは、男の人たちと話をする時、口を男たちの顔に押し付けんばかりにします。彼女たちの息は、炎であり、燃えています。例えば懺悔の時、男であれ女であれ、哀れな司祭の鼻へ、鼻や口を押し付けようとするのです。こうして鼻や息が悪臭を放ちます。或は、にんにくや玉葱を食べ、ブランデーを飲んで、聴罪司祭に息を吹きかけるならば、とりわけ司祭がしらふであれば、司祭は気を失ってしまうかもしれません。私はある男に言いました。「あんた、私は鼻から聴くではありません。耳から聴くのです。耳に話して下さい。」

鼻や口に話さないで下さい。」

第二百十一話 まじめ

色事を試してみた娘のこと

かつて一人の娘がいました。娘はとても好奇心がありました。それは好奇心のなせる業でありましたが、色事で人々がそんなふう互いに殴り合ったり、追いかけてたりするとは、一体色事にはどのような悦楽があるのだろうか、娘は知りたくなりました。娘はそれを知り体験してしまうと言いました。「これだけの事か。」こうして娘は色事のために純潔を失い、首をくくりたくなるほどの不機嫌と後悔に陥りました。

第二百十二話 まじめ

二人の息子をほしがらなかった女のこと

かつて一人の娘がいました。多くの市民の息子たちが、真面目な気持ちでその娘を得ようとしていました。娘の方はどの息子も軽蔑して言いました。「私の純潔は私にはとても大切な物です。私は、聖ヨハネや聖ヤコブの様な、聖なる二人の子供を授かる筈だと分かっているけれども、夫は持ちたくはないのです。」一年も経たないうちに、その娘は、蔭でこっそり二人の子供を作ってしまった。でもその子供たちは、聖ヨハネでも聖ヤコブでもなかったのです。

それ故、謙虚さは純潔に味方します。聖母マリアも、謙虚でなかったならば取るに足らない者であったでしょう。我々は、大切な宝をガラスの器の中へ入れて運び、やがて奪われてしまいます。純潔を失うのは不遜のせいであるということは、結構なことです。神は不遜な者たちに、己自身を知らせしめるために、その者たちをふしだらな行為へと陥し入れます。こうして聖書は、そんな例に満ちているのです。

第二百十三話 冗談

引け、ヤコブ、引け！ 引け、メッツ¹、引け！

かつてある男が、聖ヤコブの墓所へ巡礼に出かけることを誓っていて、

1 メッツは恐らく男の妻か愛人の名前。

それを暫く延期しました。冬は男にとって余りにも寒かったし、夏は余りにも暑かったのです。また春には種をまかねばならなかったし、秋には作物の取り入れをしなければならなかったのです。ある時男は巡礼に出かけたくなりました。男は二、三マイル行くと、通りに立ち両腕を広げて、一方の腕を聖ヤコブの方へ、もう一方の腕を自分の村の方へ伸ばして叫びました。「引け、ヤコブ、引け！引け、メッツ、引け！引け、ヤコブ、引け！引け、メッツ、引け！」しかし、メッツの方が聖ヤコブより強く引きました。そこで男は向きを変え、再び家へ帰りました。

こうして、「女の髪の毛の方が、教会の鐘の綱よりも引く力が強い」という、諺の通りになりました。その上、妻よりも娼婦の方が好まれるのです。かなりの女たちが、姦夫のために、殴られ、非難され、貧困に悩み、ひどい飲物や食事に苦しみます。女たちは、夫からは、情夫から蒙る十分の一の苦しみも受けないでしょう。それにもかかわらず、このような浮気な婦人が信頼され、夫に貞節でない女が、夫に寄りかかり夫に忠実であるとしているのは不思議なことです。夫の中には、誰かがかつて述べたと同じことを語る者もいます。

第二百十四話 冗談

神のために妻をめとった男のこと

一人の亭主がいて、言いました。「私は神のために妻をめとりました。これほどひどく私を後悔させた施物はありません。妻の心の中がどんなであるかは誰も分からないのです。」亭主はまた言いました。「私は、私自身や私の身内の誰よりも妻を愛しています。私は、妻が天国に住めればと願っているのです。でも私も天国へ行くことは望みません。私は妻にふさわしくないのです。神に妻を差し上げます。」その通りになりました。亭主は、妻が狼であってくれと願い、一方妻は、亭主が羊であれと願います。そうなれば、妻は亭主を食べたがるでしょう。

第二百十五話 まじめ

Quos Deus coniunxit, nemo separet.

(神が結び合わせられた人々を、誰も離してはならない)

質問があります。悪魔が、情事とか、歌や踊りで結び付けた人たちを、誰も分ける事は出来ないということ、また神が結び付けられた人たちを、誰も一緒にとどめておくことが出来ないということが、どうして起こり得るのでしょうか。「Math.19. Quos Deus coniunxit, homo non separet. (マタイによる福音書 第十九章 神が結び合わせられた人々を、人は離してはならない。)」